

第10 大洞天「括蒼山洞」と第10 福地「丹霞洞」の現況

土屋昌明

はじめに

括蒼山洞の聞玄真道長について

括蒼山洞凝真宮および関連文物

第10 福地麻姑山丹霞洞

まとめ

はじめに

2009年9月6日から8日まで3日間、第10大洞天「括蒼山洞」と第10福地「丹霞洞」の実地調査をした。本稿はその現況と初步的所見をまとめたものである。

「括蒼山洞」は司馬承禎『天地宮府図』に「周回三百里、号して盛徳隱玄の洞天と曰ふ。処州樂安県に在り、北海公涓子に属して之を治めしむ」とある¹。杜光庭『洞天福地嶽瀆名山記』では所在を「台州」にしており、治めている神仙は「平仲節」である。括蒼山洞とされる場所は、現在の浙江省仙居県に所在する。

「丹霞洞」は司馬承禎『天地宮府図』に「麻姑山に在り。是れ蔡經真人の得道の処。今に至るも雨夜には鍾磬の声を聞くこと多し。蔡真人に属して之を治めしむ」とある²。この場所の特定には検討すべき問題がある。唐の顔真卿「麻姑仙壇記」によれば、顔真卿が撫州知事のときに麻姑の故事にもとづく麻姑山のことを述べており、その場所は江西省臨川なのである。しかし、司馬承禎は麻姑山を麻姑の昇天の地と言わずに、「蔡經真人の得道の処」と言っている。そして、括蒼山洞の付近には蔡經得道の伝説があり、蔡經故宅とされる地がある。また、この土地でいわれる麻姑山は、後述するように、麻姑の長い爪を想起させる景観を備えている。そこで、ひとまず現地の伝説に準じて、「丹霞洞」の所在を仙居県だと仮定しておく。この二つの麻姑山の問題については、別稿で検討する予定である。

括蒼山洞の聞玄真道長について

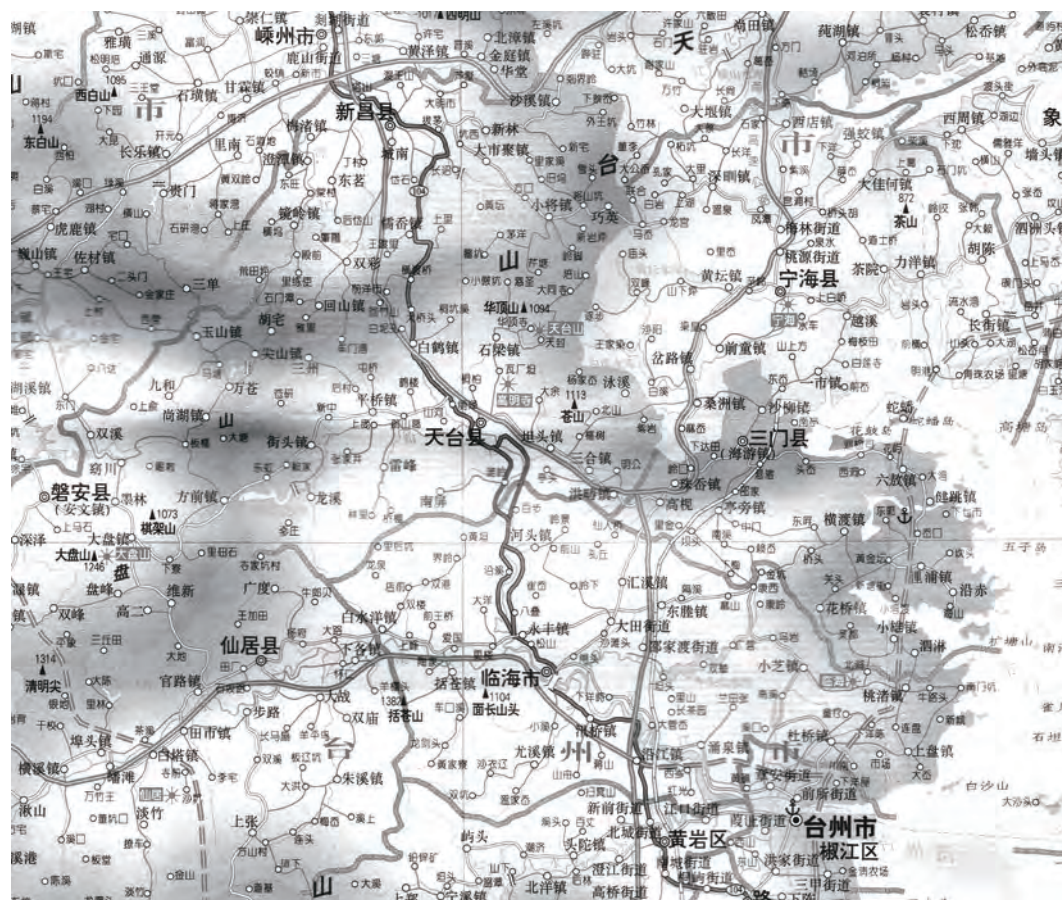
9月6日、数日前からの天台县での調査を終え、車で天台县から南へ走り、臨海県で西に方向を変え、都合約2時間で仙居県へ入った（次頁「中華人民共和国省級行政単位系列図・浙江省地図」中国地図出版社、2009年1月）。

その夜、括蒼山の関係者と懇談会が開催された。参加者のうち要人は次の方々であった。

1 司馬承禎『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻27、中華書局道教選刊本）「周廻三百里、號曰盛徳隱玄之洞天。在處州樂安縣、屬北海公涓子治之」。

2 『天地宮府図』「在麻姑山。是蔡經真人得道之處。至今雨夜多聞鍾磬之聲。屬蔡真人治之」。

- ・ 鄭世炉（浙江省仙居県老年協会会長・仙居県人民代表大会元副主任）
- ・ 聞玄真（中国道学会副会長・中国道教第十大洞天凝真宮主持・黒竜江省武当拳専門委員会会長・中国伝統医学会教授・三聖宮監院）
- ・ 楊総灯（仙居県級機関党委・機関紀委元書記・仙居県政府糾正不正之風弁公室元主任・仙居県老年協会副会長・秘書長）



仙居県周辺

この席で問道長は概略つぎのような話をした。

「大洞天は神仙の住むところであり、また「地場・物場・磁場」つまり地理環境から気候環境・居住環境にいたるまで、優れた作用がある。道教の南宗では百歳を超えるような高道者が何人もいるが、劣悪な医療状態のもとでどうしてこのような長寿ができたのか不思議といわざるをえない。よい生活環境と医療と修練がなければ到底不可能だと思われるが、そのような条件には洞天が関わっている。また洞天にはしばしば科学的には解釈不能な奇特な現象がおこる。中国の洞天福地にはそれぞれ物語があり、たとえば第1大洞天之王屋山には「愚公 山を移す」という伝説があり、第2大洞天之委羽山には大有宮の伝説がある」。

「この括蒼山の第10大洞天は徐来勒との関わりが深い。この山は福星つまり木星との関わり

があり、別名を福星山ともいい、古代の木星観測に最適の場所だった。木星は星官で第一位であり、とくに明るい星である。12年で1周するから暦法の調整に役立つ。木星の地位は清朝以降変化した。」

「清朝は満州族なので漢族が道教を信仰することをよしとしなかったため、道教文化が現在までそのまま残ることはむずかしかった。それで道教は次第に衰亡してしまった。どのような宗教でも、権力からの支持がなければ盛んになることは容易ではないもので、道教も例外ではない。自分はタイや日本・韓国でもこういう問題を議論したことがあるが、そのたびに思うのは、かの国々では宗教文化が非常によく保存されているのに、中国では廟や修道場所が破壊されてしまっていることだ。こうした点は、現在こそ破壊がもっともひどい時代だと思う。」

「道教文化は黄帝文化を主軸として、諸子百家の学と『黄帝内経』の医学が加わって漢代と唐代に盛んになった。宋代になって多くの神仙が現れた。しかし明代以降、振るわなくなってしまった。」

「中華民族の医学と道教は密接な関係だ。孫思邈などは、世界の医学と人類の生命に多大な貢献をしている。日本とも関係が深い。鑑真が日本に行ったときに、『黄帝内経』を持って行ったのは重要だ。ほかに、張仲景『傷寒論』・李時珍『本草綱目』・孫思邈『千金方』など、すべて日本に伝わった。東アジアの黄色人種が現在まで繁栄しているのは、こうした医学がなかったら難しかったかもしれない。」

「嵩山で少林寺は武術で有名だが、一番大切なのはそこの岩なのだ。それが中原の位置を確定している。それは中州文化とよばれる。それは天地の中心なのだ。中国の伝統文化を我々はちゃんと保存していない。中国の伝統文化という点では、東アジア諸国には通じあうものがある。たとえば日本の国旗は我々から見ると「無極」である。韓国の国旗は八卦と陰陽を使っていてすばらしい。中国の国旗は五星紅旗で五つの星だ。日本・韓国・中国は無極から太極が生じ、太極は兩儀を生じ、兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生じ、五行と八卦となる。日本と中国の文化交流は古代以来停止したことはない。」

「大洞天のうち、比較的保存がよいのは青城山と羅浮山だ。茅山には近代的な建築ができた。括蒼山洞の建築は去年（2008年）から作り始め、まだ一年だ。我々十大洞天の何人かの先生方は相互につきあいがある。じつは二年後に十大洞天の現職の道士を集めて、十大洞天の道教文化交流会を開催したいと考えている。その後、三十六小洞天の先生方も集めた会議や、七十二福地の先生方を集めた会議も開きたい。そうして道教文化に戦線を築いて、道教文化の道脈を確保したい。」

「漢代、呂后は道教を信仰したが、それは漢朝が無為の治を信奉したからだ。漢朝は無為の治で治められず、けっきょく滅亡した。しかし漢朝では、老子の思想が深い影響を与えていた。たとえば蕭何だが、彼が丞相の位を後継者に譲ったとき、後継者は無為の思想を用いた。」

「漢代の道教の発展にはもう一つ別の要素もある。鬼神や天地の不思議な現象に対する崇拜は世界のどの民族にもあるが、中国には長生不老の術がある。これは秦の徐福によって日本にも伝えられたが、これも道教思想と直接関連する。」

「中国になぜ十大洞天や三十六小洞天・七十二福地が形成されたのか。これは中国だけでなく、アメリカやフランスその他の国々の学者も、我々括蒼山洞に調査に来て研究する大問題である。」

我々道士の考えでは、人が洞穴から出て、建物や庭を造り、好ましい家庭を作ろうとしたとき、宇宙自然の神秘を追求することになった。自然の神秘を真正に追求し探索することができる人は「有道の士」と呼べる。古代にこうした力を持った「有道の士」には二つあり、一つは「道」といい、一つは「巫」といった。巫という言葉は、世界中どこでも、不思議な、理解できない神秘的な能力を持つ人を指す。巫という字は、二つの「人」と中間に「工」から成っている。古代は農業社会だが、巫は農業社会から離脱した、農作業をしない、天地に根ざした堂々たる人であり、二つの脳を持っている、つまり生活世界と目に見えない世界の両方に通じているのである。天と地の両方を知っている。それゆえ巫は古代において一つの神職だった。漢代にはどの村や町にもそれぞれ巫がいて、治病し祈祷していた。道教の道士が社会のいろいろな現象に関わるようになり、巫は次第に歴史から退いた。中国史において道教とキリスト教は科学を排斥しない。だからこの二つは海が川を容れるように多種多様な学問を吸収した。火薬の発明は中国の科学技術として有名だが、道士が外丹の実験から発見したものだ。天文学や暦学もそうだ。星相を推算する人々は、農業社会に貢献した。たとえば木星は12年で1周するから、木星観測によって農業の状況を推測したのだ。」

「後漢の21年に徐来勒がはじめて括蒼山洞にきたが、彼は星象を観察に来たのだ。彼は星象の観察から地震その他の自然災害を予測した。漢代の上層社会は道教を尊崇し、唐代に至るまで、多くの皇帝が丹薬を服食する習慣があった。そのため、丹薬をどこで煉ったらよいかが問題となった。丹薬を煉る場所だけではなく、丹薬を採集する場所も含めて、適切な場所を選択しなければならない。十大洞天とはそのようにして選択され、かつて丹薬が煉られた場所なのである。たとえば括蒼山洞はそうした煉丹の場所であり、かつてそこで煉丹した人々はみな宇宙や自然のことに深い認識を持っていた。そこで煉られた丹薬、修道で至ったレベル、その地の気候・風水、得道者の数などから、そこがなぜ第十位だったり第一位だったりするのが確定された。括蒼山洞は十大洞天で、福星山とも紫雲洞ともよばれ、古代の暦法では木星を観測した天文観測地点だった。歴史記載によれば、拜斗台もあったが、いまは壊されて存在しない。」

「この近辺には16の洞がある。仙人洞・朝元洞・水簾洞・福雲洞などがあり、開発はされていないが、すべて古代の煉丹の痕跡が見いだせる。括蒼山洞は我々が管理しているが、その他の洞、たとえば丹霞洞は管理されていない、地元の人々が管理しているというべきである。丹霞洞は第10福地にある。第10福地にはほかに財神洞・雪洞など洞が多いが誰も管理していない。」

「私は1998年と1999年に福岡と広島に招かれて、『黄帝内経』と中医薬・養生法を講じに行ったことがある。1999年末から韓国の釜山とソウルで二年間教えた。タイは1993年だ。国外では医学・武術関係の交流が多い。これは道教文化伝播の一つのあり方だ。私は日本と韓国が気に入っている。日本と韓国では、とくに年齢の高い人々は漢字で意志が疎通するし、教養も高い。日本の伝統医学には中国医学が保存されている。古い建物も多い。中国も古い建物をこの十年くらい保護するようになったが、すでに壊されたものは永遠に戻ってこない。再建したとしても現代的なものになってしまう。」

「当時、私は日本と韓国を往復して教えていた。そのとき日本には私の患者が20名あまりいた。私の治療は心臓や脳血管に対する非薬物治療である。『黄帝内経』と鍼灸だけを使う。日本と韓国では中国よりずっと治療しやすい。というのは、まず患者が協力的であり、治療環境も中国よ

り良い。また、患者の飲食物も中国より良い。福岡・広島など沿岸地区では脳血管障害で半身不随になる率が高く、韓国でもそうだ。私の学生は日本の医者であり、中国の鍼灸や非薬物治療を学び、心臓脳血管病を治療しようとしている。彼らは年に一度、こちらに来て研修を受ける。なかには七年連続で来ている人もいる。」

聞玄真道長は、俗名を聞世良といい、浙江省永嘉の人。5歳で祖父の聞理朴にしたがって道学を学び、その道を伝えた。修練すること40余年、道学・道医・仙学・術数・勘輿・武術・内外丹に詳しい。華中師範大学・海南大学・東北仏学院・タイ国政務院・ソウル大学・釜山医学院などで教鞭を執り、1989年から1991年と2000年から2001年に中国人民解放军海軍特殊部隊および中国人民解放军辺防部隊でも教鞭を執った。さらに、上海で「総合性全科国際特診治療慈善医療中心」を主宰している³。

聞道長の祖父であり師である聞理朴師（1892～1997）は、字は達之、道号は文素子、圓通真人・朴道人とよばれ、温州梧埏の人、龍門律宗第22代伝人、民国時期の龍門律宗の振興者とされている。温州勝美塵呂公祠に隠れていたが、方至通（平陽宜山上崗の人、平陽龍門派の始祖たる林圓丹の再伝の弟子、平陽東嶽觀住持）の風を慕い、行ってこれに従った。後に、北方に高道多しと聞き、名山大川を跋涉して各地に参学、民国13年（1924）に湖北長春觀にて受戒した。時に受戒に参じた者は五千にのぼったが、聞理朴師はその首位に輝いた。長春觀方丈の劉敬義律師は賛嘆し、みずから大法を授けた。翌年、方至通師が羽化し、聞理朴師が推されて東嶽觀住持となった。後に、中国道教第2大洞天黄岩委羽山大有宮住持。民国21年（1932）に葉宗浜師に招かれて桐柏宮崇道觀方丈となり、正月から三月までに70人余りが受戒した。これは民国道教界の三大事件の一つとされている。聞理朴師の人柄を示す楹聯がある。曰く

「焚香静坐、抱膝長吟、幽興閑情供我輩。擁資敵国、尊爵当朝、勛名事業讓他人」。

さらに、古典にもとづいて功課・経懺・音韻・儀律を整理し、十方懺礼を正したとされる。また、東嶽觀では太歳殿に「育真私塾」を主宰し、慈善的な教育をおこない、50人程の学徒が集った。著書に『道德経浅着』『文素子詩文集』があったが、文化大革命により廃棄され、わずかに詩稿が東嶽觀に残されているのみ。羽化に臨んで次の詩句を残した。曰く

「四十四年謫世塵、韜光道月羽衣身。如令依旧朝真去、安享蓬萊不老春」。⁵

中国近代から新中国の革命や政治闘争とまったく関係しようとしなかった境地がよく表現されていると感じられる詩句である。

括蒼山洞凝真宮および関連文物

9月7日に、聞道長の手配によって車で括蒼山洞凝真宮の現地に案内された。凝真宮は仙居県から東へ車で1時間ほど行った村の奥にある。村から左右に峰の続いている平地を進んでいくと、

3 この段、聞玄真道長から提供された括蒼山洞凝真宮のパンフレット『中国道教第十大洞天養生院』による。

4 葉宗浜師については、本誌『洞天福地研究』第1号の土屋「第6大洞天「赤城山洞」と第27小洞天「金庭山洞」の現況」注15を参照のこと。

5 この段、前掲『中国道教第十大洞天養生院』による。

どんづまりに凝真宮がある。凝真宮への入口には巨大なエンジュの木があり、草地にひときわ目立つ。関係者の話によると、この木は、以前は枯れていたが、聞道長がここに来てから再び葉をつけるようになったという。草地のなかに忽然とあらわれるエンジュの大木は、おそらく結界の役割をはたしているものと感じられた。そこから非常に古い（宋代という）石橋のわきを通って進むと、凝真宮のかつての建築が、北側の崖のふもとの平地に見えてくる。このかつての凝真宮の廟堂建築は、一見して民国期以前にさかのぼるものと思われた。



左手に凝真宮、右手にエンジュの枝



凝真宮、背後は新しい凝真宮、左側の建物の背後の崖に大きな洞窟がある

堂前に現代の石碑が一つあり、修繕に寄進した芳名が刻されていた。これは聞道長が建てたものである。古い凝真宮の内部にはなにもない。天井中央の棟木に寄進者の名前を記した墨書が複数あり、望遠レンズで撮影後に拡大して、その一つに乾隆 46 年の年号が読み取れた。これにより、旧凝真宮は 1781 年の建造にかかるとわかる。

6 旧凝真宮の隣の工人の宿舎は、70 年代に大衆動員でダムが建設されたときの関係者の宿舎だったようである。

新しい凝真宮は旧凝真宮の背後の崖にはりつくように設計され、現在建築中である。写真で右側の建物は八角形をしており、易の八卦にもとづいて聞道長が設計したものである。なかには三清を祀る予定とのことで、すでに木像が据えられていたが、建設途上であった。写真で左側の建物には事務室のほか、宿泊施設がある。宿泊用の部屋は、室内に崖の岩がむきだしになっており、岩のへこみにすわって瞑想できるような設計になっている。左側の建物の左背後の崖面に巨大なホール状の洞窟があり、奥へ小さな洞窟が続いている。そのホール状の洞窟の床は石敷きできれいに整備され、むしろの座が敷いてあり、5,60人はすわることができると思われる。ここで講話などいろいろな活動をおこなうという⁷。洞窟の奥には、人が立ち入れるほどの狭い洞窟が続いており、内部では洞窟が複雑につながっているとのことである。立ち入ることは許されなかったが、内部の洞窟奥に祭壇や神像などが置かれている様子はなかった。

この奥の洞窟内部から、宋代の金竜が発見された。現地で示された浙江省文物鑑定審核弁公室の2009年7月13日付け「仙居県括蒼洞《金竜白壁》に対する鑑定意見」によれば、2009年2月に凝真宮の道士が括蒼洞に対して整理事業をした際に、縦穴を一カ所発見した。穴は直径70センチ、穴の口から2.30センチのところに石板が置かれてあり、そこに青磁の碗の破片が2件、穴の底には白壁があり、その上に金竜が置かれ、さらにもう一つの白壁がそれを覆っていたという。穴の底は直径約50センチ、深さは120～130センチ、金竜は長さ11センチ、高さ7センチ、唐宋時期の金竜の風格がある。白壁の一件は長さ22.5センチ、幅8センチ、中間で断裂している。もう一件は長さ12.5センチ、幅8センチ、厚さ1センチで、風化がひどいが、「簡」というべきものとされる。青磁の碗は2件あり、ともに宋代のものと思われる。『嘉定赤城志』によれば、宋の真宗の天禧2年（1018）に「金竜白壁を投ず」という記事があることから、鑑定書では宋代のこのときの遺物と認定している。おそらく投竜簡の儀礼をおこなった際の金竜なのであろう。実物を観察したが、この説は信憑性が高いと思われた。

凝真宮の出土文物には、ほかにも「真源」二字が篆書で刻された摩崖刻石が発見されている。これは、2007年3月11日に括蒼洞から北へ約200メートル行った山腹の溝に埋もれていたのを聞道長がききつけ、村人たちと発掘したものという。巨石の表面が摩かれており、そこに篆書で「真源」と刻されている。平面の長さは56センチ、幅は28センチとのことである。年号は記されていない。聞道長は、地元の書家の鑑定によって、篆書の書風に唐代の風格が感じられるため、おそらく唐代のものであろうと考えているとのことである。

現物は現在も出土地にそのまま置かれている（GPS：北緯28.8265 東経120.8759）。たしかに立派な篆書で、土に埋もれていたために保存状態もよい。岩は平面を下にしており、ほかの部位はごつごつしている。岩は人力でたやすく移動できる大きさではない。溝は雨水が流れ下るために自然にできたものである。こうした状況から、岩は現地の山の上部から崩落してころがり落ちてきたものと思われる。現在では当該山腹の上部には崖があるだけで、宗教施設は存在しないが、以前には何らかの宗教施設あるいは参道があったものと想定される。

このほかの出土文物として、「鎮山石」（南宋、1169年9月10日）がある。これは、2007年5月に聞道長が凝真宮付近で工事中に発見。長さ50センチ、幅40センチ。文は楷書で「大

7 現地の話によれば、文化大革命時期には、この崖にある洞窟が政治集会に提供され、その用に供するために改修も施されたという。



「真源」石刻



「鎮山石」

宋乾道五年九月十日、福星山住持行法馬自善立、□□投經法籙、永鎮名山」と刻されている。凝真宮内部に展示されている。

さらに、「洞宮界」の石碑が発見されているとの示教を得て、実地調査をした。これは、括蒼洞から東南へ6キロ進み、括蒼ダム湖の南縁を車で進んだ先の峠にある（北緯 28.7971 東経 120.8765）。峠までは山間「麻坑嶺頭」の未舗装の小径で、峠から南へ下っていく小径は石畳の古道であり、宋代のものという。この峠から南は双廟郷である。峠の少し南側に荒れ果てた廟がある。石碑は、峠の道が一段高くなった境の右側草むらに隠れており、下部は土に埋もれていたが、「洞宮界」という楷書の大字と「紹興辛巳九月 日」の小字がはっきりみえた。「紹興辛巳」は 1161 年である。つまり、当時、この峠から手前は括蒼洞の洞宮であったことを意味している。これは、聞世良道長が 2007 年 5 月 17 日に弟子たちと山を歩いていて発見したとのこと。聞道

長の奇跡のうちの一つであり、括蒼洞復興の吉祥ともされている。このような境界碑はほかに北界・東界が見つかっており、北界の碑は凝真宮に保管されている。これらの標識を地形上にポイントすれば、宋代における括蒼洞の具体的な空間が把握され、それを文献史料と照合することが可能かもしれない。残念ながら南の境界以外の現地は山間部にあるため、登山が容易でなく今回は調査できなかった。



「洞宮界」(南界)石碑の立つ峠



「洞宮界」石碑

ほかには、「摩崖石刻」(南宋、1171年)がある。これは、括蒼ダム西岸の山上、海拔約400メートルの地点にある「仙人基」とよばれる岩に刻されているらしい。文は楷書で「□□都正曾居洞山。乾道辛卯上元□□」とのことだが、登山が容易でなく未確認である。

そのあと、凝真宮から括蒼山をはさんで東側にある米篩浪に車で移動した。ここへはいったん村から幹線道路まで戻り、括蒼山を迂回するかたちで行かなければならない。この山は周囲を絶壁に囲まれた台地状で、写真からみた向こう側に登山道およびエレベーターが存在する。山のふもと及び山上には宗教施設はなく、括蒼山に対する信仰とこの奇姿の山が関係するのか、どのように関係してきたかは今のところ不詳である。



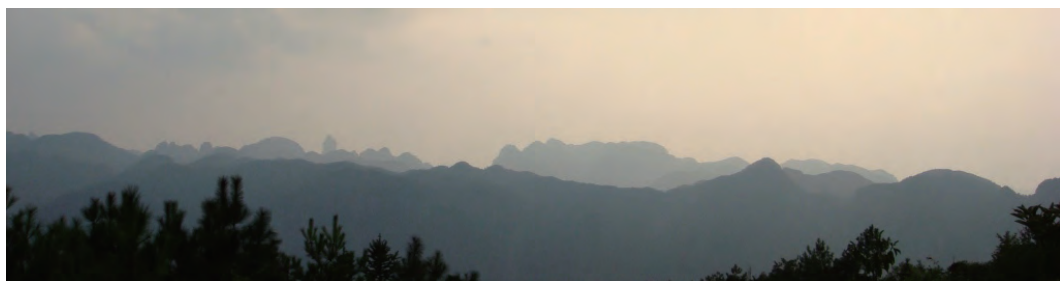
括蒼洞周辺地図

8 未確認の文物の内容については、楊総灯氏から提供された「中国道教第十大洞天《括蒼洞記》」「宋《金龜白壁》為何埋入洞中之洞」「關於括蒼洞的御賜《金龜白壁》考」の3篇の論文によった。



米篩浪

米篩浪山上からは西に括蒼山塊の山々が眺められ、峰峰の異様な姿に驚かされる（特に塔のように屹立した峰があることに注意）。この台地状の山ですら驚きだが、峰峰はそれに負けないほど奇妙な山容である。



米篩浪山上からみた括蒼山塊の山なみ

第 10 福地麻姑山丹霞洞

9月9日朝、ホテルからまず凝真宮に赴き、打ち合わせのあと凝真宮を出発して、凝真宮の北に続く峰を登っていった。峰の一角に聳える麻姑岩に登頂して山上の廟を調査するのが目的である。ここは現地では、司馬承禎のいう第 10 福地丹霞洞とみなされている。『天地宮府図』によれば、丹霞洞は麻姑山に在り、蔡經が得道した所といい、雨の夜には「鍾磬」の音が聞こえるという。近くの村には蔡經の故宅および九井もあるという。これらの伝説と伝葛洪『神仙伝』の王方平と麻姑と蔡經の故事とが、どのような歴史的経緯で結びつけられたのかはわからない。『神仙伝』では、蔡經は麻姑の指をみて不遜にも背中を搔いてもらったら気持ちいいだろうと思ってしまったわけだが、その麻姑の指とここに屹立する岩が結びつくことになったであろうことは、その景観からして容易に想定できる。



麻姑岩を東側からみる

凝真宮から北に続く峰にそって登っていった。ふもとには歴代の道士の墓が立っていた。また、「真源」の摩崖がある近くを抜けると、先の崖上に洞窟の口穴が眺められた。これは懸棺葬の跡だという。ここには懸棺葬の洞がいくつか存在するようである。懸棺葬は崖の中空に造られて「仙人の窟」とも呼ばれるのであり、仙人の昇天のあり方としてふさわしい、などと思われた。

さらに灌木が鬱蒼としげる林の中を登っていく。凝真宮の地元信者の初老の男性が鎌で草を切りながら、獣道のような道を上がっていった。午前中とはいえ、夏の日差しは暑く、また地元民の足についていくのは相当に苦しかった。2時間ほど登ると、峰を越えて北側が開け、峰がうねって東と北に分かれている所に出た。ここが第10福地丹霞洞とよばれる場所であるという(GPS: 北緯 28.8376 東経 120.8687)。日当たりがよいのに涼しく、空気の流れも穏やかであった。付近に洞窟があるというが、現地の認識では、第10福地とは洞窟そのものではなく、この南北の峰に挟まれたやや広い空間がそれであるとのこと。



第10福地の廟

コンクリートでこしらえた廟があったが、それが福地とどう関連するかは不明である。ここ

で地元の民衆が麻姑を祀っており、聞道長が言っていた財神洞だと思われる。廟の内部には真新しい神像や壁画が飾られ、お香のあとが新しく残っていた。地元の農婦がここを通る際に祈るといふ。こんな山上を日常的に歩くのかと思ったが、実際、我々が登っている最中にも、前からひょいと農婦が涼しい顔で歩いてきたので魂消たことがあった。

麻姑岩に登頂すると、そこは巨岩が折り重なって中に空間ができており、壁と屋根がある廟となっている（GPS：北緯 28.839 東経 120.8703）。入口の題額には「仙姑岩」とある。内部には数十の真新しい神像があちこちに並んでおり、壁画も新しく描かれている。



仙姑岩廟の最上部の神像と壁画と落書

壁面には文化大革命当時の題詩が残っていた。おそらく内部の神像は 1966 年の「破四旧」運動で壊滅したのであろう。それが括蒼洞の再建とともに修復されつつあることが見て取れた。また、この廟の周辺には巨岩の隙間に空洞があり、神像がおかれたり、そこで修道者が居住したりした形跡がある。それらの名称は地元の道士にも不詳であった。

まとめ

第 10 大洞天の括蒼山洞は浙江省仙居県にあり、東西に続く丘陵の崖に東南向きの大きなホール状の洞窟、その奥にさらに小さい洞窟が続いている。そこでは、少なくとも宋代から道教の祭祀がおこなわれ、洞天として「洞宮界」が設定されていたことを証明する実物資料が見いだされている。唐代以前については文献資料しかないとはいえ、この地点が第 10 大洞天として信仰されていたことはまちがいないと思われる。

ここも桐柏山と同じようにダム湖が建造されて景観が変更されており、ダム湖ができる以前には、洞窟の前に豊かな水量の河川が存在したであろう。東西に続く丘陵には、東側に所在する麻姑岩までかつては何らかの宗教的な施設が点在していた可能性がある。ここで言う麻姑岩が、司馬承禎らの言う麻姑山と同一なのかは検討を要し、第 10 福地丹霞洞の認定もそれに連動することになる。

現地は、現在では仙居と臨海とを通る街道から、南の山地に入ってしまったどんづまりに所在するが、かつては古道を通して南に抜けられた。「洞宮界」の標示の出土によって、こうした古道が東西南北に所在していたことがわかる。これは、洞天がある意味で城郭のように、東西南北の入口を備えた空間として認識されており、おそらくその中央に洞窟が位置していたことを意味する。遅くとも宋代には、その洞窟の入口で金竜の祭祀が本当におこなわれていたことが出土文物によって証明された。その洞窟の奥の地底に神仙世界が存在すると思うゆえに、金竜の祭祀は、奥へ続く洞窟の入口でおこなわれたのである。だとすると、洞窟が東西南北を備えた洞宮界の中央に位置することの宗教思想的な象徴性が前提されていたと思われる。また、そのような前提があったとしたら、それは括蒼山洞に特殊なものなのか、あるいは洞天に一般的なものなのかも検討されるべきであろう。

現在の括蒼山洞の道教は、聞玄真道長の活躍によって活発化しており、先師が天台山の桐柏観に関係していたために、現在でも両者には密接な連携があるようである。聞道長は洞天信仰に根拠づけた、中国各地の道観との相互交流を企図しており、洞天信仰にもとづく新たな宗教的なネットワークが構築されつつあることが認識できた。

謝辞

多大なご示教をくださった聞玄真道長、ならびに多くの便宜をはかってくださった鄭世烜氏、研究資料を提供くださった楊総灯氏をはじめ、ご協力いただいた括蒼山洞の関係各位に心からの感謝を表す。